

片柳栄一著『初期アウグスティヌス哲学の形成』

司会報告

中川 純男

1999年度中世哲学会における書評会での質問要旨を提出していただき、それに対する片柳氏のコメントとともに掲載する。

質疑応答の概要

岡部由紀子氏

マニ教、アカデミア派懐疑論、新プラトン主義に対する初期アウグスティヌスの思索の軌跡をダイナミックに捉える試みとして読みました。とりわけ書き下ろし部分での *Contra Academicos* の扱いは大きく、私自身の関心に偏して以下の点を質問したい。①「アカデミア派偽装説」をアウグスティヌスはどの程度、どの文脈でとっていたとお考えなのか。②初期アウグスティヌスにおける「真理」の位置づけについて書簡Iをどのように読まれたか。③ご著書では、アウグスティヌスがカルネアデスの *probabile* の主張のうちに新プラトン主義的二世界論を読みとり、そこに信仰の根本構造を見いだそうとしたと、また彼は、行為において *probabile* という語ないし概念について同じように扱っていると位置づけておられると考えてよいか。(私自身は「違い」を描き出すことが両者の真理観を際立たせたと考えたい)。

宮内 璋氏

所謂アウグスティヌスの回心は、緊密な連なりにありながら、二つのこととしてあったのではなかろうか。(I) 知の展開とそれによる懐疑の克服、(II) そこに至る不可欠の道としての托身キリストへの信仰、として。(I) は感覚的相を超える真なる存在の開披によって (II) の真正な出遣いを可能にし、信仰を支える権威(聖書、教会)を肯う思慮によって (II) を準備。(II) は (I) に先立ち、幼時よりマニ教埋没の期に於てさえ無縁ではなかった。だが、(I) において (II) は見出されなかつ

た (*Conf.* VII. 21. 27)。そして (II) は *beata vita* の根源的遍在的願いと人間理性の無力の自覚に拠るとはいえ安住すべき状態ではない。後年の (I) と (II) の、より緊密な共働「知解を探究する信仰」はそこに発している。とするとその起点であった (II) は、事実であったとしても、アウグスティヌス自身 (知—信?) にとって (我々にとっても又) 何であったのかが改めて問われなければならないのではなからうか。

森 泰男氏

片柳栄一氏のお考えでは、「初期アウグスティヌス哲学」はいつからいつまでを含むのであろうか。「カッシアタム対話篇」から『告白』までというのが、一般的な理解であろう。しかし、両者の間には、思想的な変化がある。その変化を片柳氏はどのように捉えておられるのであろうか (例えば、信仰と理性の関係の問題)。

次に、片柳氏はなぜ『創世記逐語注解』を『初期アウグスティヌス哲学の形成』の中に加えられたのであろうか。どんなに遅く見ても、『創世記逐語注解』は中期に属しているのではないか。実はそこに、片柳氏の「初期アウグスティヌス哲学」理解の特色と問題点が露呈しているのではないか。具体的にいえば、「創造における *conversio*」の理解に関して、私には異論がある。アウグスティヌスの *conversio* とプロティノスの *ἐπιστροφή* の間には大きな相違があるのではないか。(『中世思想研究』第 39 号所収の拙論参照)。

加藤 武氏

三つの問いを提起したい。

(1) まず、方法について。片柳さんは自覚的に「文献学的」方法を買っておられる。しかし同時に文献学的方法の枠をはみだす意図も秘めておられるのではないか。

(2) 「第一の探究する自由」という表現への着目にみちびかれて、判断の根拠にいたる考察が興味深く迎られている。この場合「第一の」とは、「原初的な」という意味か、それとも「最初の」という意味か、いずれをさすのか。これは閉鎖された空間を破り開く探究の場の表現として、問い自体というよりも問いの生起する場所を表す。(『告白』 V. 11. 21)。ここには驚きと喜びがこめられている。たんに第二、第三と続く意味での第一であるより以上に、「原初の」という意味ではないか。

(3) 著者の探索は、判断の根拠としての光の現出の境界で終わっている。しかし、アウグスティヌスの本来の問いは、むしろそこから始まるのではないか。in cuius oculi mihi quaestio sum, et ipse est languor meus.

水落健治氏

初期アウグスティヌスが、信仰と理性との関係をどのように考えていたか、という点について質問させていただきたい。質問は第3篇第3章「探求の二重の道」に関わる。

片柳氏は、同箇所『秩序論』II.5.16, II.9.26 ff.をとり上げ、「時間的には権威が、しかし事柄においては理性が先行する」(II.9.26)という語を中心に据えて、信仰と理性の問題をいわゆる「知解を求める信仰」の枠組みで理解しておられるように思われる(350~58頁)。だが『秩序論』では、信仰と理性とはむしろ「並列するふたつの道」として述べられているのではないか。(1)I.8.24では自由学芸が「学問を愛する人」を「真理の把握に対して……より整えられたものとなす」と称賛され、II.12.35 ff.で学問論が展開されているが、この記述は、「理性=学問」を信仰とは独立に肯定的に評価することなしにはあり得ないのではないか。(2)I.11.32でアウグスティヌスは、聖書を愛読してはいるものの「哲学」の語源を知らない母モニカを「知恵への愛において非常に進んだ」と述べているが、ここには、哲学(学問)によらず「信仰」によって「哲学の最高頂点」にまで至ったモニカと、哲学(学問)の道を一步一步進んで「頂点」に至ろうとするアウグスティヌスやリケンティウスらとの対比があるのではないか。

この問題は、本書では十分論じられていない問題——初期アウグスティヌスが『音楽論』など自由学芸に関する書物を執筆した動機をいかに捉えるか——に関わると考えられる。

著者コメント—————片柳栄一

拙書『初期アウグスティヌス哲学の形成』の書評会での質問に個別詳細に答える紙数がないので、この書の意図、方法などを説明しながら、簡略に答えたい。